

地域と大学



社会福祉法人優輝福祉会理事長

熊原 保

54年広島県総領町(現庄原市)生まれ。駒沢大文学部卒。養護老人ホーム生活指導員などを経て07年から現職。新見公立大客員准教授、日本社会事業大大学院の非常勤講師なども務める。「逆手塾」会長。庄原市在住。

お笑いタレントの東貴博さん(51)が駒沢大法学部を受験し、合格したという。「自分は小卒だけど、息子には大学に行ってほしい」というのが亡父のコメディアン、東八郎さんの願いだっただけで、若い頃は浪人中に八郎さんが他界したこともあり、進学はいったん諦めていた。

ところが、大先輩のコメディアンが70代にして社会人特別入試で駒大に合格したことを知る。秋本欽一さんである。刺激を受け、「わが子に勉強する姿を見せたい」と50代での受験に挑んだらしい。

数年前から大学や大学院の教壇に立つ機会を得た私も、社会人学生の熱心さには恐れ入る。生きる喜びのように、講義に聞き入る人が多い。

「人生100年」という時代である。東さんも秋本さんのように、社会人こそ学び直しや自己成長の機会を用意したい。学びたい人全てが学べる環境が大切であり、学生と社会人といった区切りもなくなっていくと思ふ。

共に創造し響き合う関係に

コロナ禍で、オンライン講義が一般的になった。在籍する大学以外でもオンラインで履修でき、単位の取得も可能になれば、学ぶ意欲は高まるのではないかと。

志望大学を名前で選ぶのではなく、研究したい分野や教授陣で選ぶことが望ましい。そしてもう一つ、どこで学ぶか、大学の立地地域も選択肢に加えてほしい。

私が受験生だった半世紀前、大学のうたい文句は「世界に羽ばたく人材の育成」だった。21世紀の今、目指すべきは「地域で求められる人材の育成」だろう。

岡山県北部にある新見公立大は、市民と学生を対象として毎月1回、産官学民の連携による公開講座「鳴滝塾」を催している。生活支援に当たる専門職の人材育成をめざし、講師も社会人である。参加者数は5年間で延べ3千人を超える。

奇数月には講師を招いての

講演会とパネル討論会、偶数月には塾生の活動報告や視察研修、懇談会などを行う。身近な地域課題を検討し、考え合う機会となっている。

学食や売店の運営を地元の障害者福祉事業所に委託したり、地元祭りの運営に学生が加わったり、さまざまな展開も生まれたりしている。交流や実習を通じ、社会人として必要な基本能力を培うと同時にやりがいも味わえるようだ。

また、地域が抱える課題について、住民や地場企業が大学の教員や学生に話を持ち掛け、協働で試行している。学生に地元意識が芽生えれば、大学にも企業にもプラスだろう。地域とともに歩む大学のモデルであり、地域振興の活水源といえる。

地域志向は、県立広島大も同じようだ。大学の事務部長さんの講話を先日、庄原市内で聞いた。演題は「備北とともに歩む大学をめざして」。

備北地方に生きる私たちにあって、この大学は誇りである。講演後、私たちの障害者福祉事業所との「農福連携」について、指導や助言をお願いした。食と農、福祉について、

て、共に育み、学び、響き合う関係を築いていきたい。

私の暮らす中国山地は過疎の先進地であり、課題先進地でもある。そんなマイナスのイメージを逆手に取ったのが「里山」主義である。課題を解決できる大きなチャンスと考えて、ささやかな社会実験を重ねている。

大げさな言い方は、めざすのは経済システムや価値観の転換である。持続可能な社会のモデルとして、「里山」地域にこそ新しい可能性があると感じている。

思い描いているのは、全ての方が尊重され、誰ひとり見捨てられず、多様な人々と交流できる。「人間が大きく見える仕組みや営みである。残念ながら、今の社会ではお金のために組織の歯車となり、「社畜」化されるように見えてならない。

大学の数は、全国で800校近い。それぞれが「里山」にある課題を研究し、地元の人材を活用できないものが。地域を創り、響き合う「サトヤマ大学」として、「人間が大きく見える」まっすぐの核となるよう望んでいる。

